

チャペル週報

No.18

2012 .10.15 ~10.19

秋季宗教運動特集号

喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。

(ローマの信徒への手紙12章15節)



神戸三田キャンパス1号館

関西学院宗教センター

☆チャペル・スケジュール☆

時間 10:35～11:05 場所 各学部チャペル

- 10月15日(月) 神 船 越 和 樹 (神学部4年)
経 舟 木 讓 (宗教主事)
人 田 村 久瑠美 (人間福祉学部M1)
聖和 聖書物語「2匹のさかなと5つのパン・池の上の人かげ」
-
- 10月16日(火) 神 岩 野 祐 介 (神学部准教授)
文 Andreas Rusterholz (宗教主事)
社 岩手県野田村を訪れて 社会学部震災ボランティア参加学生
法 音楽チャペル ゴスペルクワイア P.O.V.
経 チャペルでのオリエンテーション総括
商 音楽チャペル 聖歌隊
国 Timothy Tsu (国際学部教授)
聖和 新 谷 陽 介 (広報室職員)
総 鈴 木 英 輔 (総合政策学部教授)
-
- 10月17日(水) 神 浅 野 淳 博 (神学部教授)
社 動詞シリーズ「生きる」⑥ 打 樋 啓 史 (宗教主事)
法 English Chapel Christian M. Hermansen (宣教師)
経 English Music Chapel Timothy Dale Boyle (宣教師)
商 深 山 明 (商学部教授)
人 Ruth M. Grubel (院長)
国 徐 亦 猛 (神戸基督改革宗長老会牧師)
聖和 保育科2年有志「まんまるりんごの音楽隊」
理 「真実一路」松 木 真 一 (宗教主事)
総 村 瀬 義 史 (宗教主事)
-
- 10月18日(木) 大学合同チャペル「総主題：いのち」10:20～11:20
西宮上ヶ原キャンパス 会場：中央講堂
「漂流する世界に耐えうる生と知を求めて：玄海原発訴訟4500人の原告のひとりとして」
木 村 公 一 (福岡国際キリスト教会牧師)
西宮聖和キャンパス 会場：メアリー・イザベラ・ランバスチャペル
「私のいのちは私のものか？」飯 謙 (神戸女学院大学学長)
神戸三田キャンパス 会場：Ⅵ号館101号教室
「平和をつくり出す人たち」～心の中に平和を～ 近 藤 絃 子 (広島原爆の語り部)
-
- 10月19日(金) 大学合同チャペル「総主題：いのち」10:20～11:20
西宮上ヶ原キャンパス 会場：中央講堂
「平和をつくり出す人たち」～心の中に平和を～ 近 藤 絃 子 (広島原爆の語り部)
西宮聖和キャンパス 会場：メアリー・イザベラ・ランバスチャペル
「漂流する世界に耐えうる生と知を求めて：玄海原発訴訟4500人の原告のひとりとして」
木 村 公 一 (福岡国際キリスト教会牧師)
神戸三田キャンパス 会場：Ⅵ号館101号教室
「向き合うこと・生きること」村 瀬 義 史 (総合政策学部宗教主事)
-

◇ランバス早天祈祷会 8:20～8:40

ランバス記念礼拝堂(上ヶ原)

10月18日(木) 宗教運動のために

新 谷 陽 介 (広報室職員)

10月19日(金) 宣教師の働きを覚えて

Christian M.Hermansen (宣教師)

「いのち」を考える文脈

飯

謙

わたしたちが^{いのち}生命の問題をそれ自体として日常の中で考えることは少ないかもしれません。しかし災害や戦争、事故、病など、心ならずも生命を落とす人を目の当たりにするとき、さらにその出来事が人間の尊厳を踏みじめるようなかたちで生じたとき、わたしたちは「生命とは何か」と考えずにおれません。聖書は単刀直入に、「生命は神のものである」（エゼキエル書 18:4）と宣言します。どういう意味でしょうか。人間は神の奴隷だと言っているのでしょうか。それに従うしかない、諦観を言い表しているのでしょうか。

古代ギリシア神話に基づく悲劇には、そのメッセージが読み取れます。たとえばオイディプスの神話は、人が運命に逆らうことができない悲しい現実を描いています。オイディプスの父はテーベという都市国家の王でした。神託によって、自身の生命が息子（オイディプス）に奪われると聞かされ、従者に息子を殺害するよう命じます。しかし息子は生き延び、やがて成長して、偶発的にはありましたが父を殺します。この物語は、たとえ運命を避けようと企てても最後にはそれが実現するという教訓を含むと解されています。

やはり古代ギリシアで語られたシーシュポス（シジフォス）のエピソードにも似た考えが示されています。この人はギリシア中部テッサリア王の息子でした。自分が王位継承できないことに怒って策を弄しますが成功せず、ついには地界に落とされます。そこで彼はゼウスから巨大な石を山頂に押し上げる労働を命じられます。しかし山頂近くまで来ると、石は地底まで落ちていく — 彼はこれを終生続けなければなりません。このストーリーにも、人の分を越えた行動を戒める思いが込められていると思えます。つまり、人は運命にしたがうしかないのだ、と。

古代ユダヤの文書である聖書も同様に語っていると思われがちです。けれども、聖書に言葉を残すコヘレトと呼ばれた知者は、次のように反論しています。すべてが定められているのならば、人が生きることは空しい、と。確かにそうです。受験勉強、辛い就職活動、それだけでなく人生の方向転換を強いられる機会は山ほどあります。最初から結果が決まっているとするならば、「労苦は何になろう」（コヘレ

トの言葉 1:2-3)。コヘレトは、そうであるならば快樂を追求し、愉悅に浸ろうと考えます。しかし「それも空しかった」と繰り返します。こうして試行錯誤を重ねた末、この人は運命があるかないかに疑念を表明しつつ、隣人のために「種を蒔こう」（同 11:6）と思ひ至ります。土地の所有者もはっきりしないコヘレトの生きた社会で種を蒔くことは、その収穫にあずかる人が誰であるか分からないという意味で、見返りを求めない愛（アガペー）と呼ぶことができます。

イエスもあるとき、「友のために命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」（ヨハネ 15:13）、「自分を捨て……わたしに従いなさい」（マタイ 16:24）と申しました。これは自暴自棄の勧めではありません。日頃わたしたちは自分自身を一番大切だと思っているかもしれないが、それよりも大切なものと出会ってみよというメッセージ——マスターリー・フォー・サーヴィスへとつながるメッセージです。わたしたちは、いろいろな理由から自分で自分のみを守るため汲々とせねばなりません。そのために、誰かを蹴り落とすようなことも胸を痛めることなくやっているかもしれせん。しかし聖書はそれとは異なる在り方を示します。秋季宗教運動の季節。わたしたちが人格をかたち造る大切な時期に、マスターリー・フォー・サーヴィスの空気の中で過ごす意義を心に刻みたく思います。

（神戸女学院大学学長）

「平和をつくり出す人たち」～心の中に平和を～

近 藤 紘 子

原子爆弾のことなど記憶にない私が広島語り部として歩むのは、次の時代を担う子供たちが神から与えられた命を大切に生きていって欲しいと祈り、願うからです。昭和20年(1945年)8月6日、私は広島市の爆心地から1.1キロの牧師館にて、生後八ヶ月で家の下敷きになりましたが、奇跡的に助かりました。広島流川教会の牧師の子として生まれ育ち、廃墟となった広島市の被爆者の苦悩を肌で感じ、また多くの救済

する人々との出会いを通して、戦争のもたらす苦難を知りました。特に幼い頃は、あの原爆を落とした人たちが悪人であって、原子爆弾が広島に落とされなければ、多くの人たちは尊い命を亡くすことはなかったのにと、彼らへの憎しみが増し、何時の日か、この私が敵を討つ、なぜならば私は正しい人だからと思っていました。その出会いは意外と早く訪れました。米軍機エノラ・ゲイ号のロバート・ルイス副操縦士は原爆投下直後、飛行機の窓から見た広島は消えていた。飛行日誌に「おお、神よ、私たちは何ということをしてしまったのか」と涙声で書いたと語る姿に10才の私は驚き、私は変えられました。自分の中にも多くの悪があることに気づき、彼の涙から戦争とは勝者も敗者もないことを知りました。

そして思春期の研究提供者として扱われた屈辱感の中、神は助けを求めた私の祈りを聞いて下さらなかったと思い、広島との関わりを絶つことを決め、あの広島から遠くへと逃げ出しました。しかしノーベル賞を受賞したパール・バックに「人間の引き起こす戦争で一番の犠牲者は子供です。そのことを決して忘れないでね」との言葉を思い出し、心に迫ってきました。また理解できなかった父の隠退説教で、やっと私は父が理解できたのです。「生き残った者として、広島のために、世界平和のために生きて欲しい」という言葉に反発し、父に背を向け、また若き日、神様は祈りをお聞き下さらないと思っていましたが、それは長い時間をかけて一番よい方法で聞いて下さいました。神にも父にも背を向けて歩き始めたこのような者をも、神様はしかと捕らえ、立ち帰らせ、用いて下さいました。

罪多き者をも神は愛して下さいっており、だからこそ愛を持って歩みたいのです。「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。」(ヨハネの第一の手紙4:10)。この言葉を噛みしめつつ、赦されている者として、謙虚に愛を持って歩みたいのです。人種、国籍、言語、文化、宗教等の違いを超え、世界の子供たちは平和を求めています。その子供たちは聖フランシスの「慰められるよりは、慰めることを。理解されるよりは、理解することを。愛されるよりは、愛することを、私が求めますように、ゆるすからゆるされ、自分を捨てて死に、永遠の命をいただくのですから」と訴えています。

「平和をつくり出す人たちは、さいわいである。彼らは神の子と呼ばれるであろう。」(マタイ4:9 = 口語訳)とあります。何時の時代にあっても、平和をつくり出すこ

との難しさ、しかし、イエスは弟子たちに、いや私たちに平和をつくり出す者となりなさい、と語り続けておられるのです。次の時代を担う子供たち、あなたたち一人ひとりが、神様から与えられた命を最後の時まで何人も奪ってはなりませんし、その世界の子供たち、あなたたちが平和に生きていけるように、祈り続けていきたいと思います。

(広島原爆の語り部)

向き合うこと・生きること

村 瀬 義 史

「いのちの水」という短い物語があります。三人の旅人(戦士、魔法使い、商人)が「いのちの水」を求めて旅をしています。飲めば永遠に生きると言われるその水を得るため、戦士は鎧を着て武器をもち、魔法使いは魔法の衣をまとい、商人は大金をポケットにつめこんでいます。ところが、いざ目的地に着いて三人はびっくり。「いのちの水」というのは誰でもタダで飲むことのできる、ささやかな湧き水だったのです。ただし、飲むにはひざまずかなければなりません。三人は、身につけているものが邪魔して、身をかがめることができず困ってしまいます。彼らは、裸になることでようやくその水を飲むことができた、という話です(『深い知恵の話 100』参照)。

当日の聖書箇所も参照しつつ、皆さんとご一緒に思いめぐらしてみたいのは、この物語から私が思わされた三つの点です。第一は、私たちが生きる基本的な力の源が、ささやかな日常の事柄の中にあるということです。たとえば、自分を受け止めてくれる身近な誰かとの関係の中で、自分がどれほど活かされているでしょうか。自分の弱さや不完全さ、失敗、衝突、周囲の誤解や無理解などによって、孤独や心身の不調を感じ、自信や自尊心を失ったりすることが誰にもあるものです。こういう「危機」や「揺らぎ」の時、(おそらく後になってから分かるのですが)いつもと変わらず自分に接し、理解してくれる人々との何気ないやり取りが、消えそうになった「わたし」をゆっくり回復させてくれます。枯れた木に水が流れこむように。

人間関係が全てではありませんが、多くの場合、身近な人とのコミュニケーションが、私たちにバイタリティをくれているのではないのでしょうか。

第二の点は、上の点で述べたような「水」にありつける時というのは、自分を覆っている様々な「防具」や「武器」をはずした、無防備でありのままの自分になった時なのではないか、ということです。旅人たちは、何も持たぬ「ただの人」になった時、水を得ました。私たちの多くは、外見、立ち振る舞い、言動その他において、周囲からどう思われるかを基準に様々な「着物」を身につけます。「着物」は自分をより好ましく見せる武器であると同時に、あるがままの自分を隠す防具でもあります。誰かに対して全くの無防備になることは困難ですが、身構える必要のない安全な間柄でこそ、力や魔法やお金で勝ち取ることのできない「いのちの水」を見出せるのではないかと思うのです。

三つ目は、旅人たちが共に湧き水から飲む姿から思うのですが、身の回りの人も、自分と同じように揺らぎや危機を経験しつつ生きている人間であることを、敬意と共感をもって受け止めることについてです。大学生になると、これまで以上に自分自身を客観的に見ることができるようになります。様々な出会いや挑戦の中では、自分の光も闇も見えてくるはずですが、もし自分の中にある闇の部分も直視し受け止めることができるなら、他者に対して、より深く大らかなまなざしを向けることができるようになるでしょう。目に見える部分だけに囚われて他者や自分を判断することから自由になるのです。どれほど互いが違っていても、人として共有しているものを見いだせる時、心の水脈がつながるような「人と人」としての連帯が生まれるのではないのでしょうか。

「人は、あなたが言ったことやしたことを忘れてしまっても、それによってどのように感じたかは決して忘れないものです」(マヤ・アンジェロウ、詩人)。私たちは様々な感情を重ねながら今生きています。上に書いたことは私たちの生きる現実の、ほんの一側面に過ぎないかもしれませんが、しかしこのようにちょっと立ち止まり、自分が本当のところ、何を感じ、何を求めて生きているか、自分が何によって活かされているかをしみじみとふり返る地点から、改めて見えてくる「いのち」のリアリティがあると思うのです。

(総合政策学部宗教主事)

●大阪梅田キャンパスチャペル

阪急梅田駅から徒歩すぐ、アプローズタワー 14 階の大阪梅田キャンパスでは、授業期間中の毎週金曜日にチャペルアワーを実施しています。(18:00~18:20 1405 教室)

10月19日(金) 田淵 結(宗教総主事)

10月26日(金) Andreas Rusterholz(文学部宗教主事)

●ランバスチャペルアワー

学生たちが企画するチャペルです。秋学期の予定は以下のとおりです。

10月23日(火)、11月20日(火)

いずれもランバス記念礼拝堂(上ヶ原)にて10:35~11:05

●関西学院会館の日曜礼拝

授業期間中の第二第四日曜日に、教職員と学生有志による礼拝が行なわれます。一部英語を用いるバイリンガル形式です。どなたでも参加できますのでどうぞお越しください。

10月28日(日) 10:00~11:00

関西学院会館ベーツチャペル

●CD・DVDライブラリー

吉岡記念館の宗教センターには、教会音楽、キリスト教に関するCDやDVDを備えています。本学学生及び教職員であればどなたでも利用できますので、希望者は事務室までお越しください。(学生証等証明書必要)

●使用済み切手収集にご協力ください

本学では日本キリスト教海外医療協力会(JOCS)切手部の活動に協力し、使用済み切手の収集をしています。通常切手も対象としていますのでどうぞ吉岡記念館常設の回収箱にお届けください。

●盲導犬育成のための募金にご協力お願いします

関西学院宗教活動委員会は、目の不自由な方々の社会参加促進を願い、社会福祉法人「日本ライトハウス」の募金活動に協力しています。吉岡記念館はじめ各学部カウンターに募金箱を設置しておりますので皆様の温かいご協力をお願いいたします。

コラム：関西学院紹介(2)「中学部」

123年前の創立以来、男子校として歩んできた関西学院中学部は今年の春から95名の女子生徒を迎え、共学校となりました。これに合わせ、中庭に面する壁は全面ガラスの新校舎や地下に温水プールを備えた新体育館での活動が始まりました。春の爽やかな風のような雰囲気を感じる新学期からいま約半年が過ぎ、少し彩づいたいのちの恵みを豊かに感じる秋風となって、中学部の二学期の歩みが始まっています。

上ヶ原キャンパスの南の角にある中学部は新制中学部の初代部長の矢内正一先生が唱えられた「一隅の教育」を継承し、新制中学創立60周年を機に、「感謝・祈り・練達」を教育目標に制定しました。祈りの人であった W.R. ランバス先生の肖像が掲げられた礼拝堂で、この春、記録に残る出来事が生じました。宗教部に属する生徒たちが自主的に企画運営する水曜日の朝の「早天礼拝」の初回、予想を絶する出席者がありました。これまで、多くても20名、少ないときは数名の出席者がなんと130名の出席。これからも自由に自然な言葉、そして自分が日常用いているやわらかい言葉で祈ることができるタレントを多くの生徒が身につけてくれることを願っています。

中学部では何があろうと日曜を除く毎日9時20分から20分間、高中部礼拝堂で礼拝をさせていただきます。どなたでもいつでも出席していただけます。ぜひ中学部に流れる風を感じてみてください。